

(5. a) では、Sally is my sister という命題の真偽が問題になる度合いが大きいため、どちらかと言えば TO-BE DELETION が適用されない文が適している。それに対して、(5. b) では he is part of my furniture は、その真偽が問題になるとは考えにくく、つまり、主観的・個人的見解である度合いが大きく、それゆえ to be が削除された構造が適している。

このような観察から、少くとも知覚、認知、思考動詞の場合、that 節、不定詞節、to be が削除された構造は、この順で、客観的（真偽が問題になる度合いが大きい）から主観的個人的な命題を表すと考えられよう。

上の観察は、埋め込み文の述部叙述が名詞や形容詞の場合であったが、ではそれが進行形や完了形についてはどうであろうか。もしこれらが何の制限もなく容認可能であるとすれば、上で述べた観察は幾分修正される必要がでてくるであろう。なぜなら、進行形や完了形は、その主語名詞句を主観的に特徴づけているとは考えにくいからである。そこで、文献に現れている文法性の判断を見てみることにしよう。

Abbot (1973) は、次のような文法性の判断を下している。

6. a. I believe him to be writing a book.

b. I believe him to have written a book.

また Carlson (1979) でも同じような判断が見られる。

7. a. John believes Bill to be building a cabin.

b. John believes Bill to have eaten a grape.

そして Stockwell et al. (1973) でも同じである。

8. a. I believe him to be working very hard.

b. I believe him to have worked very hard.

c. I believe him to have worked yesterday.

このような例では、補文がどういう意味で主観的・個人的命題を表しているのか明らかではない。もしこのような文が非の打ち所なく容認可能であれば、次の Abbot の観察が正しいのかもしれない。

“Semantically, the infinitive complements to epistemic verbs express states: present states with predicate nouns and adjectives and the progressive tenses; resultant states with the perfect tenses; and generic states with the plain present tense.” (Abbot, 同掲書, p.59)

しかしこの観察では、上記の Postal や Borkin などのかなり微妙な差が全く説明できない。さらに、別の文法性判断を下す母国語話者も存在する。Steever (同掲書) は、次のような文法性の判断を下している。

9. a. Mary believes John to have been honest with her.

b. ?* Mary believes John to have played jai alai at dawn.

Steever は (9) について、その文法性の差の原因については何も述べていないが、おそらく主観性 (a) と客観性 (b) が役割を演じていると思われる。

また、あるインフォーマントは (10) のような文は非常に不自然であるという判断を下した。

10. ?* I believe him to be reading that book.

さらに、Bolinger (1977) でも次のような例文および判断が与えられている。

11. ?? I believe the word to have already come.

以上のように、判断は人によって揺れがあるように見受けられる。これが方言差であるのか、個人語の差であるのか、それとも全く容認可能であるとした人が果して十分繊細にその判断を下しているのか、ということは今後の研究に待たねばならないが、少くとも (9) から (11) のような判断を下す話者が存在することから、不定詞節は、進行形、完了形の場合にも主観的、個人的陳述を表現するのに好まれるという説は支持されると思われる。

次に補文の述語が be 動詞以外の場合に目を転じてみたい。次の Abbot の例を考えてみよう。

12. He goes to the door. He opens it and what does he find but a baby in a basket. So then

- { a. (I believe that) he yells for his wife. }
- { b. ** I believe him to yell for his wife. }

ここでは *he yells for his wife* という文が一回切りの行為を表すために用いられている。この場合は、不定詞補文を持つ文は全く容認できない。

それでは、いわゆる習慣的行為を表す場合はどうか¹であろうか。(13)を考えてみよう。

13. a. ? We believe $\left\{ \begin{array}{l} \text{him} \\ \text{Pigmies} \end{array} \right\}$ to eat ants.

b. ? I believe him to write interesting books.

c. ?* We believe him to go to school $\left\{ \begin{array}{l} \text{on foot.} \\ \text{every day} \end{array} \right\}$

d. ?* We believe him to go to Japan once a year,

(a)(b)は(c)(d)に比べて容認可能性が高い。(12)と(13)からどうということが推論できるであろうか。(12)の *yell for his wife* は一回切りの行為であった。これは主語 *he* についての主観的陳述とは考えられない。客観性・主観性を一つのスケールと考えるならば、その述語はおそらく客観性の側の極に置くことができよう。それに対して、(13. a. b)の *eat ants* や *write interesting books* と、(13. c. d)の *go to school on foot/every day*, *go to Japan once a year* はどうかであろうか。この二つのグループ間の容認可能性の差は、(a. b)の述語がその(意味上の)主語の特性と呼んでよいくらいの(常習的)行為を表しているのに対して、(c. d)の述語は単なる習慣的行為を表しているにすぎないことに帰因するように思われる。前者を *characterizing habitual* (特徴づけをする習慣述語)、後者を *simple habitual* と呼ぶとすれば、*characterizing habitual* の方は(どちらかといえば)その特徴づけをされている名詞句に対する、主語の主観的判断になりやすいのに対し、*simple habitual* の方は主語の主観を離れた事実として認識されやすいということから説明されよう。

次に、いわゆる状態動詞を考えてみたい。

(14) a. ? I believe him to live in Tokyo.

b. ? I believe him to like icecream.

(14)はいずれも 'unusual', 'unnatural' と判断されたが、(13. c. d)よりは容認可能性が高いということである。

最後に(15)のような例を考えてみよう。

15. a. I consider these classifications to more properly *apply* to sentences than to verbs or verb phrases.

b. It will also be necessary to consider the base component to *permit* freely extended generation of ...

(15)は両方とも言語学論文から採ったものである。ここで(a)の *apply*, (b)の *permit* は状態とは言えないであろう。しかし、(13. c. d)と全く同じ意味での行為とも言えないように思われる。これらの動詞は抽象的な意味で使われており、その意味上の主語の性格、特徴づけを行っていると考えられよう。

以上の議論より、知覚、認知動詞の不定詞補文に生じうる一般動詞を、容認可能なものから順に並べると次のようになろう。

16. a. 特徴を表す形容詞句、名詞句

(honest, an honest boy など)

抽象の意味での *apply*, *permit* など

b. 状態動詞

(live, like など)

特徴を表す行為詞句 (= *characterizing habitual*)

(eat ants など)

c. 単純習慣動詞句 (= *simple habitual*)

(go to Japan once a year など)

d. 一回切りの動作を表す動詞句

2.

この節では、(17)のように主節動詞が受動態になっている文を考察してみたい。

17. John is believed to be honest.

能動態の構文が第一節で述べられたような制限を受けるので受動態の文も同様の制限を受けるのではないかと思われがちだが、事実はそうではない。(18)を考えてみよう。

18. ?* We $\left\{ \begin{array}{l} \text{think} \\ \text{believe} \end{array} \right\}$ him to go to school on foot.

この文は(16)の制限により容認可能性が低いが、それに対応する受動文は完全に容認可能である。

19. He is $\left\{ \begin{array}{l} \text{thought} \\ \text{believed} \end{array} \right\}$ to go to school on foot.

同様のことが(20)と(21)についても言える。

20. a. ? We $\left\{ \begin{array}{l} \text{believe} \\ \text{think} \end{array} \right\}$ Pigmies to eat ants.b. Pigmies are $\left\{ \begin{array}{l} \text{believed} \\ \text{thought} \end{array} \right\}$ to eat ants.

21. a. ? We believe the judge to accept bribes.

b. The judge is believed to accept bribes.

このように、主節が受動態の場合、その不定詞補文は(16)の(d)を除く全ての述語を容認するように思われる。

この事実はどのように説明できるであろうか。筆者はここで問題の受動文に対して、幾分暫定的に、次のような派生による説明を与えたいと思う。

22. a. We believe that he goes to school on foot.

↓ PASSIVE

b. That he goes to school on foot is believed (by us).

↓ EXTRAPOSITION

c. It is believed that he goes to school on foot.

↓ A-VERB RAISING など

d. He is believed to go to school on foot.

派生の段階で A-VERB RAISING を使用することで、(d)の構造が受ける制約は、(同じく A-VERB RAISING の適用を受ける) seem や appear に対する制約と同様のものとなることが予測され、これは経験的に正しいと思われる。すなわち、seem や appear も(16)の述語を(d)を除き全て許容する。

23. a. He seems to be $\left\{ \begin{array}{l} \text{honest} \\ \text{an honest man} \end{array} \right\}$.

b. This rule seems to apply to this structure.

c. He seems to like icecream.

d. Pigmies seem to eat ants.

e. Mary seems to go to Japan once a year.

さらにこの分析は、次のよく知られている現象に説明を与えることができるように思われる。すなわち、say という動詞は、能動文では不定詞節を伴う構造に現れることができないにもかかわらず、受動文ではそれが可能である。

24. a. *They say John to be a crook.

b. John is said to be a crook.

これも、(24. b) のすぐ前の構造が(24. a) のようなものではなく、実は(24)のようなものであったと考えることで納得がいく。

25. It is said that John is a crook.

同様のことが rumor についてもあてはまる。

26. a. *They rumored John to be a crook.

b. John is rumored to be a crook.

c. It is rumored that John is a crook.

派生によるこのような説明が正しいかどうかは、もっと精密な検証を必要とするが、現在のところ有望な仮説のように思われる。³

注

1. 文献から関連あるものを引用すると次の通りである。
 - (i) ?I believe him to write books. (Abbot, 1973, p.58)
 - (ii) John believes Bill to build cabins. (Carlson, 1979, p.42)
 - (iii) *I believe him to work very hard. (Stockwell et al. 1973, p.570)
 ここでまた判断が人によってまちまちであり、このバラつきをどう解釈するかは今後の研究に待たねばならない。
2. どの述語が characterizing で、どの述語がそうでないかは、多分に語用論の問題であろう。
3. 同じような派生による説明が Kuno (1975) で日本語について与えられている。

REFERENCES

- Abbot, C. (1973) *Derivations of English Infinitives*, Ph. D. dissertation, Yale University.
- Beach, W. A. et al. (eds.) (1977) *Papers from the Thirteenth Regional Meeting*, CLS.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*, Longman.
- Borkin, A. (1974) *Raising to Object Position: A Study in the Syntax and Semantics of Clause Merging*, Ph. D. dissertation, The University of Michigan.
- Carlson, G. (1979) "Comments on infinitives," in Engdahl and Stein (eds.) pp.32-46.
- Engdahl, E. and M. J. Stein (eds.) (1979) *Studies Presented to Emmon Bach by his Students*, University of Massachusetts at Amherst.
- Grossman, R. et al. (eds.) (1975) *Papers from the Eleventh Regional Meeting*, CLS.
- Kuno, S. (1975) "Subject raising," in Shibatani (ed.) pp.17-50.
- Postal, P. M. (1974) *On Raising: One Rule of English Grammar and its Theoretical Implications*, The MIT Press.
- Riddle, E. (1975) "Some pragmatic conditions on complementizer choice," in Grossman et al. (eds.) pp.467-74.
- Shibatani, M. (ed.) (1975) *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, Academic Press.
- Steever, S. B. (1977) "Raising, meaning, and conversational implicature," in Beach et al. (eds.) pp. 590-602.
- Stockwell, R. P. et al. (eds.) (1973) *The Major Syntactic Structures in English*, Holt, Rinehart and Winston.